

和歌山県 埋蔵文化財情報

17

目 次

<研究ノート>

- | | |
|------------------------------------|------|
| 和歌山県下の弥生土器 — 弥生時代中期を中心にして — | 土井孝之 |
| 紀伊 11～14世紀代 日常雑器類の編年 — 有田郡を中心にして — | 渋谷高秀 |
| 14～16世紀の染付、青磁、白磁の編年の現状 | 上田秀夫 |
| 根来寺における白土器の消長 | 村田 弘 |
| 瓦器廃滅後の土師器皿の様相 — 紀の川水系を中心にして — | 佐伯和也 |

<資料紹介>

- | | |
|-------------------|------|
| 吉礼砂礫谷古窯跡群表採遺物について | 武内雅人 |
|-------------------|------|

<遺跡紹介>

- | | |
|----------------------------------|-------|
| 昭和57～59年に和歌山市が実施した主な埋蔵文化財発掘調査の概要 | 大野左千夫 |
| 有田郡吉備町土生池遺跡の第二次発掘調査 | 武内雅人 |
| 橋本市内の埋蔵文化財について | 大岡康之 |
| 1984年度 和歌山県埋蔵文化財発掘状況 | 井石好裕 |
| あとがき | |

1985. 3

社団法人 和歌山県文化財研究会

〈研究ノート〉

和歌山県下の弥生土器 — 弥生時代中期を中心にして —

(社)和歌山県文化財研究会技術員 土井孝之

1. はじめに

各地の弥生土器の地域色が論じられるようになって、早や20年余りが過ぎ去ろうとしている。その間、各地で集落論のみならず土器論に関しても、様々な緻密な研究がなされるようになり、より詳細な形で点から面への研究に進展している。にもかかわらず、県下での良好な資料の公表は、様々な事情により遅滞しているのが現状である。そのため、畿内との対応関係、県下独特の地域色、また、編年作業においても、多かれ少なかれ影響を受けることとなっている。

また、県下の弥生土器の特質の一つとして取り出された紀伊型甕は、「南近畿における前・中期弥生式土器の一樣相」に報告されて以後、各地の研究者に認識されるようになり、紀伊型甕の出土は、県内での発掘例よりも他地域での発掘例がより目立ち、紀伊型甕の研究においても後進的な立場にあると言っても過言ではなからう。

今回の資料操作は、「和歌山県和歌山市南黒田の土器」を始めとし、太田・黒田遺跡、宇田森遺跡、吉田遺跡、大野中遺跡、岡村遺跡などの発掘資料、最近、筆者が遺物整理を行なった田殿・尾中遺跡、岡村遺跡などの成果を踏まえつつ、検討を試みることにしたい。

2. 弥生土器の研究略史

県下の弥生土器の編年作業は、「南黒田の土器」一括遺物を第Ⅱ様式に近い形態を呈し、断面三角形貼付突帯を付す特徴のある土器として第Ⅲ様式古段階に位置付けることから始められた。その後、宇田森遺跡において切り合い関係のある12ピットとA溝の出土遺物から、12ピットの一括遺物が貼付突帯を多用し、凹線文を使用しない第Ⅲ様式の古い様相を呈する物と報告され、南黒田遺跡の土器との同時性が指摘されている。また、宇田森遺跡A溝の資料には、第Ⅳ様式の中でも古い段階に属する事が指摘されている。更に、小賀直樹「和歌山県の弥生式土器」では、県下の弥生土器の概要が述べられている。これらの県下での第Ⅲ様式から第Ⅳ様式の資料を軸として、県内を始め各地域での併行資料に利用されている。

このように、稀少ではあるが、中期弥生土器の編年において、第Ⅲ様式から第Ⅳ様式を中心として、壺に付せられた貼付突帯と櫛描文様の種類の限定、凹線文手法の存否に着目した観点は、現在に至ってもその基本を揺るがすことのできないところである。

3. 県下の弥生土器の特質

弥生土器の地域色については、佐原真・田辺昭三による畿内中心部と周辺部に区別する論から、今や、地域色をより緻密に検討するに至っている。従来、県下の弥生土器は、瀬戸内の影響が強く、播磨・西摂などと共通する様相を呈し、貼付突帯文・凹線文の地域として取り挙げられている。

以下、各器種の特質でみるように、器種毎に独特性が認められ、凹線文手法の採用、調整技法にみられるヘラ削り技法の多用、櫛描による施文方法、装飾変化などに地域色が読みとれる。

壺形土器——断面三角形貼付突帯を付せられた壺は、紀の川下流域を中心とし、亀の川、日方川、有田川、日高川流域に分布している。現在のところ、紀の川流域では、那賀郡岩出町岡田遺跡を東限として、それより上流、奈良県吉野川に至っては確実な資料の提示がなされていない。时期的に第Ⅲ様式・第Ⅲ様式から第Ⅳ様式への過渡期の資料については、突帯を付した物が多く、広口壺・直口壺（『弥生式土器集成』では、細頸壺形土器と呼称する）の中では突帯を付さない物を凌駕する傾向にある。

また、壺形土器の中で直口壺の占める比率が高く、その中でも第Ⅲ様式の古い段階では直立形態になる物が主流を占め、第Ⅲ様式新段階から第Ⅳ様式古段階には、口縁下の部分に軽い段がつき、
(土器 11)
やや外に開く傾向がみられる。有田郡吉備町田殿・尾中遺跡 SD02～04 の資料では、直口壺が広口壺を凌駕する事から、一特質になる事を報告した。
(土器 29)
(註 6)

広口壺、直口壺には、第Ⅲ様式新段階で、貼付突帯と櫛描直線文・波状文・斜格子文が施こされるのを通例とする。第Ⅲ様式新段階で、一部に櫛描簾状文、ひねり出し突帯、凹線文手法が見られるようになる。第Ⅳ様式古段階で、凹線文手法が多用され、同時に櫛描文各種が盛んに使用される。

壺形土器——泉下で、Ⅰ様式新段階において、遠賀川系壺と縄文時代晩期の形態・技法を受け継いだ紀伊型壺の共存資料が確認されたのを契機とし、各地で縄文時代から弥生時代へ移り変わる土器の様相が明らかにされつつある。県内において、第Ⅲ様式の紀伊型壺の資料が稀少であるため、この段階の実態を把握することができない。これに反し、各地特に、和泉、淡路、西摂、播磨など

では第Ⅲ様式段階に紀伊型壺の搬入が顕著である。各地の豊富な資料からみれば、在地における紀伊型壺の比率もかなり高いものと推察することができる。紀伊型壺は、第Ⅳ様式古段階まで残る。

第Ⅲ様式には、口頸部が「く」の字に屈曲し端部に面をもつ壺に、紀伊型壺にみられるヘラケズリ技法が多用され、外面頸部以下全面ヘラケズリを特徴とする壺がかなりの比率を占める。第Ⅲ様式新段階では、外面ヘラケズリの壺は、ハケ目やタタキ目を行なう壺を下回ることになる。
(土器 31)

高杯形土器——泉下の高杯の形態は、各地との差異があまり見受けられず、杯口口縁端が外方に伸びる高杯と、口縁端が外方に伸び垂下する高杯との間には、当然の事ながら時期差が認められる。
(土器 47)

その他、第Ⅳ様式古段階において新器種の成立が見られる。

4. 泉下の弥生土器編年

筆者は、弥生土器の地域色を含め、以下の諸事項、①断面三角形貼付突帯の付される位置、②①の壺と共存する資料、③凹線文手法の在否、④櫛描文の装飾変化、⑤ヘラケズリ、タタキ目などの整形技法の変化等に着目し、第Ⅲ様式から第Ⅳ様式の細分を試みようとしている。

表 2 のように、中期弥生土器を 7 段階に細分する事が可能である。第 1・2 段階については、良好な一括資料が得られておらず今後の資料増加を待ちたい。第 3 段階から 7 段階については、基本的に、井藤・寺沢案に依拠した段階を踏まえることになる。特に 5 段階については、井藤案でも指摘される通り、分離することが難しいが、今一つの分離方法として、第 4 段階および第 6 段階の良
(註 7)








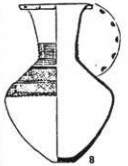
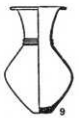


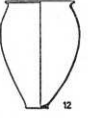
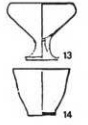
















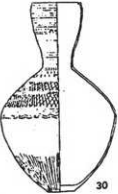
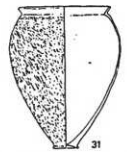


























第1段階	?						
第2段階							
第3段階							
							
第4段階							
							
第5段階							
第6段階							
							
第7段階							
	?						
第7段階	?	1~7 岡村遺跡 211グリッド4層上面、8~14 南黒田ビット、15~21 宇田森遺跡Hトレンチ16、17区 12ビット、22~25 太田・黒田遺跡土塚36、26~31 太田・黒田遺跡井戸11、 32~37 大野中遺跡包含層、38~40 岡村遺跡溝SD-5、41~48 宇田森遺跡H溝 49~57 吉田遺跡H-3区溝 縮尺 約15分の1					

表2 和歌山県下の中期弥生土器編年試案

段階	畿内併行段階	文様面からみた諸特徴	一括資料
第1段階	第Ⅱ様式古段階		?
第2段階	第Ⅱ様式新段階	襷描文(直線文が主体)。	岡村遺跡(1980)211グリッド4層上面
第3段階	第Ⅲ様式古段階	凹線文出現前の段階。襷描文(斜格子文が目立つ)+断面三角形突帯下位。	宇田森遺跡(1968)Hトレンチ16・17区12ビット同(1969)土坑。南黒田 ビット太田・黒田遺跡土坑36(3F-D1土坑1)土坑5(4F-U20)方形土坑SK001
第4段階	第Ⅱ様式新段階	凹線文出現第1段階。襷描文の盛用段階。断面三角形突帯上位。	太田・黒田遺跡井戸11(4F-L9井戸SE30)
第5段階	第Ⅲ様式新段階 第Ⅳ様式古段階	凹線文出現第2段階。襷描文の盛用段階。断面三角形突帯上位。	大野中遺跡(1972)包含層、岡村遺跡(1980)溝SD-5、
第6段階	第Ⅳ様式古段階	凹線文盛用段階。襷描文(簾状文が増加)盛用段階。断面三角形突帯減少。	宇田森遺跡(1968)A溝、同(1969)B溝、吉田遺跡(1970)H3区溝
第7段階	第Ⅳ様式新段階	凹線文の採用器種限定、退化の段階。無文化傾向。	?

表1. 中期弥生土器文様からみた諸特徴

良好な資料を得る結果となった。第7段階についても、第1・2段階同様に良好な資料が乏しい。

以上、簡単であるが、和歌山県の中期弥生土器について概観してきた。今後、資料の増加を待って、より詳細に県下の弥生土器について論及する必要がある。尚、太田・黒田遺跡の資料の掲載については、大野左千夫氏より快諾頂いた。

(註1) 白石太郎・森浩一「近畿における前・中期弥生式土器の様相」考古学ジャーナル33, 1969年

(註2) 坪井清足「和歌山県和歌山市南黒田の土器」『弥生式土器集成資料編1』1968年

(註3) 小賀直樹「和歌山市宇田森遺跡発掘調査概報」和歌山県教育委員会、1968年

(註4) 小賀直樹「和歌山県の弥生式土器」『和歌山の研究』第一巻、1979年

(註5) 武内雅人「岡田遺跡発掘調査概報Ⅲ」岩出町教育委員会、1982年

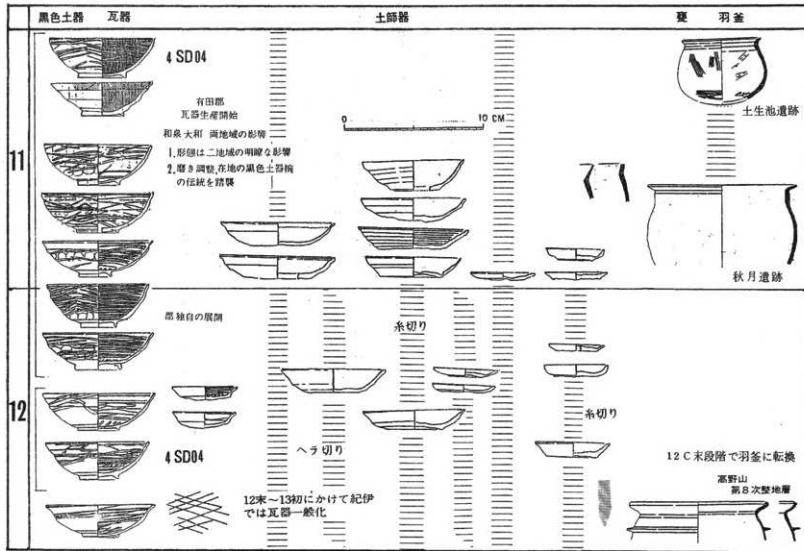
(註6) 土井孝之「弥生時代中期」『田殿・尾中遺跡』吉備町教育委員会、1982年

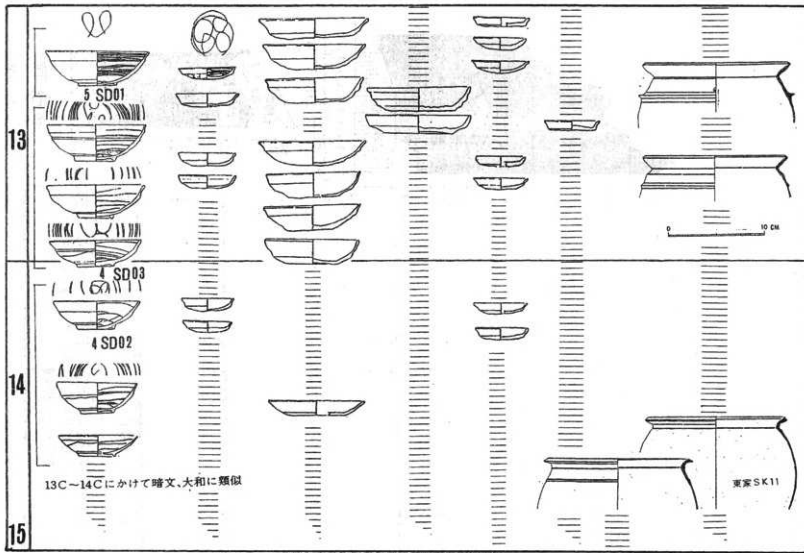
(註7) 井藤暁子「近畿」『弥生土器1』、1983年

紀伊、11～14世紀代、日常雑器類の編年 — 有田郡を中心にして —

(社)和歌山県文化財研究会技術員 渋谷高秀

有田郡野田地区遺跡において、層位・重複関係を有し、同一地点より出土した11～14世紀にかけての資料は、中世庶民生活の一端を我々の眼前に提示し、急務であった紀伊の中世土器編年や土器が有する地域色の問題、(編年・地域色の抽出)この基礎作業の上に展開される中世土器の生産流通の諸問題等々の事柄の解明に向けて、多くの問題を提起した。編年は、層位・重複関係を有する資料を規準として、各器種の前後関係を把握した。資料的には、12世紀の遺物が少量なもの他の時代に関しては、瓦器碗の形態や調整手法の変化を基準にすれば、欠ける型式はないものと考え





有田郡 11~14世紀 野田地区遺跡 出土遺物 編年案

られる。基礎資料である編年作成過程で、判明した事例は以下の通りである。

1. 黒色土器から瓦器への転換過程は、和泉・大和両地域の影響——形態——を受け、在地の黒色土器工人の調整技法を継承している。瓦器出現によって、黒色土器碗、土師器碗が消滅する。有田郡の成立時の瓦器碗は、規格外をもたない。

2. 紀伊の瓦器碗は、11～14世紀にかけて、形態・技法共に旧郡単位で地域色が存在する。瓦器の生産・流通も、旧郡単位で完結していたものと考えられる。

3. 土師器皿は、大・小二種存在し、13世紀中葉以降、瓦器碗の規格が崩壊する過程と規を同じく縮小する。

4. 紀伊独自の糸切り土師器は、瓦器生産の消長と同一である。静止は、11～12世紀代、回転は11～14世紀、ヘラ切りは、12世紀に存在する。

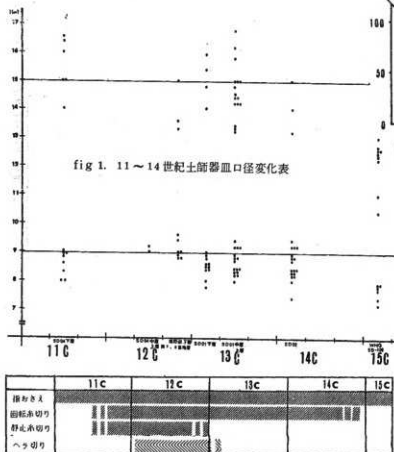


fig 2. 11～14世紀代、土師器皿底部処理技法の消長

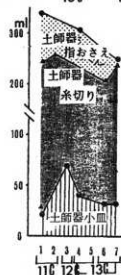
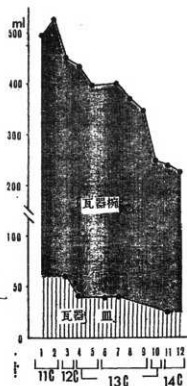


fig 3. 容量表

14～16世紀の染付、青磁、白磁の編年の現状

和歌山県教育委員会文化財課技師 上田秀夫

14～16世紀における中国陶磁の編年観はここ数年間でかなり定着しつつある。しかし、考古学的な資料として余り一般的になじみのないものなので、ここで、その編年観の概略を報告したい。

1 染付について(1～8)

詳細については仏教芸術142号、貿易陶磁研究Ⅱに染付のセット関係とその時期について触れているので参照願いたい。ここでは新たに碗Ⅳ類・Ⅴ類を付加している。通常において、碗Ⅲ類と皿Ⅲ類はセット関係を成し、根来寺の焼亡する1585年の段階での最終のセット関係もこの組合わせと考えられていた。しかし、昭和56年度の発掘調査によってⅢ類の皿とセット関係を持つ、口縁の外反するⅣ類の碗が出土し(4、「昭和56年度根来寺坊院跡」)、焼亡直前の時期の碗、皿のセットとしてⅣ類の碗、Ⅲ類の皿の組み合わせが確認された。又、Ⅴ類の碗(5)は昭和56年度の根来寺西部地区の発掘調査で、兵火直後の層から検出されたもので、1585年以前には見られないものである(「根来寺西部地区遺跡発掘調査概報」昭和57年)。高台がやや外広きで、高台端部に砥砂状のものが付着する。

2 青磁について(9～23)

青磁についても細分類や施釉上の特徴は貿易陶磁Ⅱに示したので参照願いたい。A、B類が蓮弁文系、C類が雷文帯系、D類は口縁の外反するもの、E類は口縁の内彎するものである。なお、青磁の主体は碗で、皿や盤などは全体を通して系統的に把握しにくいので省略した。又、表で青磁碗の下限を16世紀中葉に置いているのは、中国陶磁の主体が染付へと移行していく15世紀後半以降、青磁の変化は緩慢になり、退行段階に入るため、16世紀後半代には残存形態としてのみ存在すると考えるためである。

3. 白磁について(24～43)

表に示したA群～E群の編年観は貿易陶磁Ⅱの森田氏によるものを図化したものである。白磁は16世紀代を中心に前代(A～D群)とやや異なるタイプの染付と同様の器形をもつ一群が大量に出土する。森田氏のE群に相反するものである。碗、皿、菊皿、盃など器種も多様であるが、中国陶磁における組成としては皿の機能を主体的に分担している。皿で最も一般的なものは37の端反りのタイプで、16世紀タイプの白磁皿といえばこれを指す。しかし、16世紀代を通して器形的な変化はほとんどないものの、造りの丁寧なⅠ類(41、42)と雑なⅡ類(43)があり、Ⅰ類には大形と小形がある。Ⅰ類には外底に青花銘などを持つものが多く、釉には光沢があり胎土も精良で純白に近い。やや古手のタイプと漠然と考えられており、染付皿との器形的な関係から15世紀代に出現することが予想されているが、根拠を欠いていた。しかし、昭和58年度の根来寺の発掘でSK5と呼ぶ土域から染付のⅡ類の皿と外底に「弘治年造」の青花銘を持つⅠ類の白磁皿が共存することが報告され(「昭和58年度根来寺坊院跡」)、少くともこのタイプの皿が16世紀の初頭には存在するこ

とが判明し、従来、16世紀タイプと総称していた端反りの白磁皿をⅠ類とⅡ類とに分類することが可能になった。

根来寺における白土器の消長

(社)和歌山県文化財研究会技術員 村田 弘

新義真言宗の総本山として知られる根来寺は、全国的にも著名な古刹であるとともにその興亡の歴史を地下にとどめた我国を代表する中世の寺院遺跡でもある。県教委では昭和55年より第1次10ヶ年調査計画をスタートさせ遺跡の本格的な調査に着手した。本年度で調査は5年目を迎えたがこれまでの調査によって遺跡の範囲、塔頭の規模、その構造などが明らかにされつつある。

また出土遺物も多く、中世の商品流通、日常生活を知る上で貴重な資料を提供してきた。とりわけ中国製磁器に関しては前担当、上田秀夫によって編年、セット関係などいくつかの成果が発表されている。しかしながら日常雑器についてはまだまだ不明な点が多く、土器器皿の編年作業等の整理・研究は進んでいないのが現状である。

本稿ではその中のひとつ、土器器皿について——特に15世紀代を中心に出土すると考えられる根来の白土器について焦点を絞り、その概要の紹介と消長に関して若干の考察を加えたい。

なお、紙面の関係上その要旨のみ、簡条書きで記すことにしたい。

1. 根来の白土器の特徴

- a. 畿内中心部で一般に言われる白色系土師皿とはやや異なり色調は純白色を呈し胎土は極めてよく水順されており焼成も良好である。
- b. 器壁は概して薄く、口径に比して底径が大きく、また平坦である。この点では畿内中心部の白色系土師皿と類似する。
- c. 形態、技法によって数タイプに分類される。

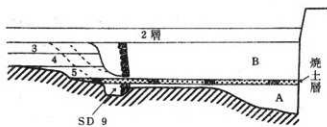
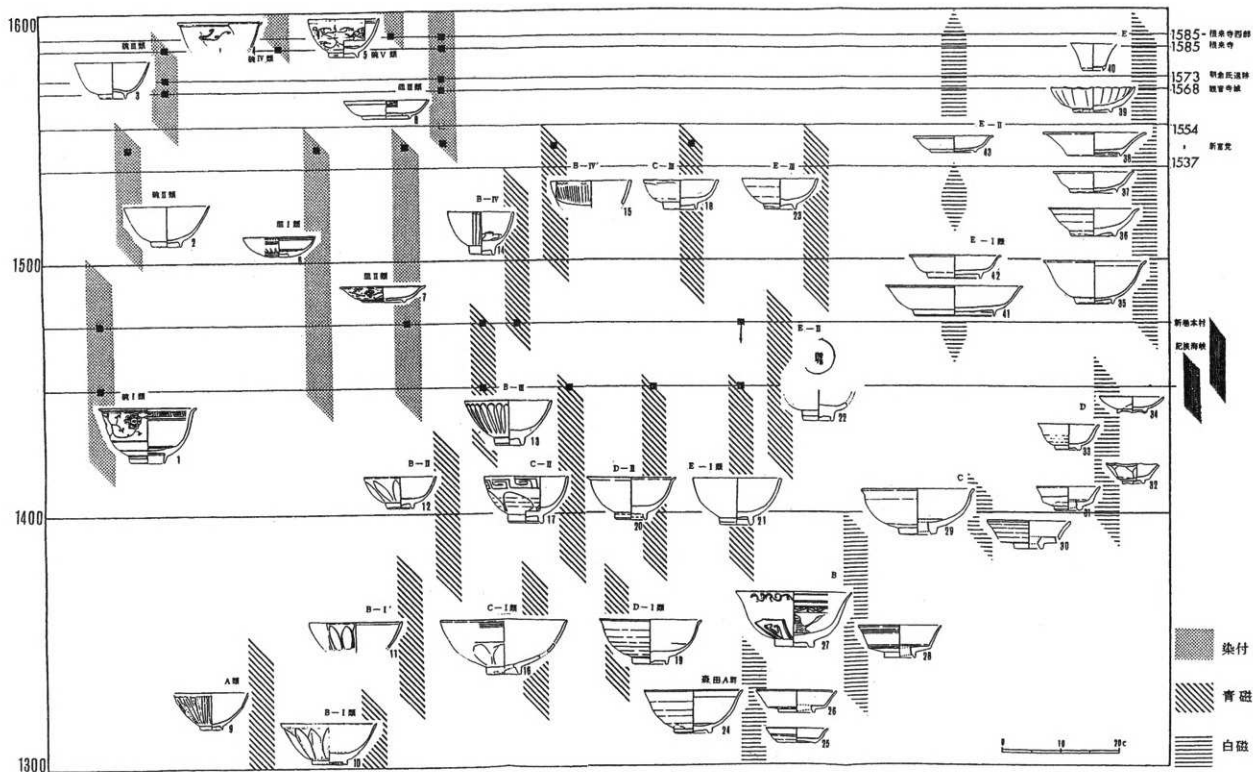


図1. 84-1次断面模式図

層および遺構	推定実年代
2層	(14C末～15C初頭)
整地土A	(14C中～後)
SV 01	(14C中頃)
3・4・5層	(?)
焼土層	(13C末)
SD-09	(13C後～末)
整地土B	(13C後半)



上田論文・14～16世紀の染付、青磁、白磁の編年表

2. 従来、根来ではこの手の皿は瓦器消滅直後、15世紀初頭に現われるものと考えられてきたが今次の調査で、1～2型式古いと考えられるものを検出した。底部糸切で瓦器と共伴しており、14世紀中～後にかけてのものと考えられる。(図1.2参照)

3. この手の皿が量的に増加するのは15世紀代に入ってからで、そのピークは15世紀中頃である。(盛時には土師器皿の8割程度を占めるもようである。図3参照)



図2 白土器

4. 16世紀初頭と考えられる一括遺物には全く含まれておらず15世紀末段階で消滅する可能性が高く、16世紀代に残ることはない。この点、他地域の白色系土器の傾向とは異なる。

5. 3.4の事実、またその中間を埋める資料よりその出現→消滅は図3に示すように15世紀中頃をピークとする山なりの曲線を描く。

6. この白土器に代るように15C末～16C初頭に出現するのが“根来通有の皿”と呼ばれているタイプの皿である。県内でも根来地区、及び近接する岡田遺跡でしか出土しておらずきわめて特徴的な皿である。その特

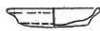


図3 根来通有の皿

徴として a. 他の土師器に比べて赤味が強く胎土にタサリ礫を含む、b. 口縁部が一回で完結する強い横ナデのため著しく肥厚する。c. 径9cm前後の小皿と11cm前後の中皿がある。

7. この“根来通有の皿”は16世紀代、天正の兵火時(1585)まで続く。この間、畿内一般に見られる体部がラッパ状に大きく開いて立上るタイプの皿も散見するがその量は極めて少ないといえる。

	土 師 器		瓦 器	須恵質	国産陶器	瓦 質	中国製磁器	瓦その他		
	赤 皿	白 皿	陶・皿	鉢	壺・壺鉢他	瓦鉢他	白 磁 器	瓦その他		
整地土B	465 (52)	3 (0.3)	5 (0.6)	402 (45)	6 (0.7)	1 (0.1)	2 (0.2)	2 (0.2)	886	
SD-09	285 (88)	3 (1.0)		23 (7.0)	1 (0.3)		2 (0.6)	9 (3)	323	
焼 土	389 (96)	2 (0.5)		9 (2.2)	3 (0.7)				403	
SV-01	350 (89)	16 (4)	3 (0.7)			1 (0.2)	1 (0.2)	1 (0.2)	393	
整地土A	1813 (86)	125 (5)		93 (4)	22 (1.0)	26 (1.2)	5 (0.2)	8 (0.4)	5 (0.2)	2097
第②層	293 (55)	144 (27)	3 (0.6)	10 (1.8)		67 (12.6)	2 (0.3)	3 (0.5)	8 (1.5)	530
第③層	251 (37.5)	190 (28.4)		199 (29.7)	5 (0.7)	14 (2.1)	2 (0.3)	4 (0.6)	5 (0.7)	670
第④層	1031 (70.6)	100 (6.8)	15 (1.0)	283 (19.4)	8 (0.5)	14 (1.0)	4 (0.3)	1 (0.1)	5 (0.3)	1461
第⑤層	442 (64)	9 (0.9)	2 (0.3)	234 (34.0)	1 (0.1)			1 (0.1)		690

表1 84-1次層、遺構別組成表

() %

8. 以上のことより根来では大きく別けて15世紀が「白の時代」、16世紀が「赤の時代」とでも呼べるような状況を呈し、その転換期にもっとも大きな画期が認められる。また15世紀以降近畿一円で土師皿の地域色が徐々に薄れていく中で、逆に根来においては地域色が濃く出ているといえよう。

9. 推論の域を出るものではないが、ひとつの可能性として白土器と瓦器焼工人の関係が考えられないであろうか。(たとえば平安後期の緑釉工人と白土器の関連が述べられているように。)

また、根来通有タイプの皿に関していえば、そのピークが根来寺そのものの整時と期を同じくしており、山内での需用供給体制が確立していた可能性が充分考えられよう。

以上、概略を述べたが土師皿の整理研究はまだ緒についたばかりであり不明な点が多い。今後、編年作業の基礎となる資料の抽出作業や、他地域の在り方との対比、比較検討をかきねていきたいと考えている。

なお本稿執筆にあたっては、県・文化財課上田技師、同辻林主査より種々御教示いただいた。感謝の意を表する次第である。また紙面の都合上、実測図の大部分は割愛せざるを得なかった。詳しくは報告書を参考にされたい。

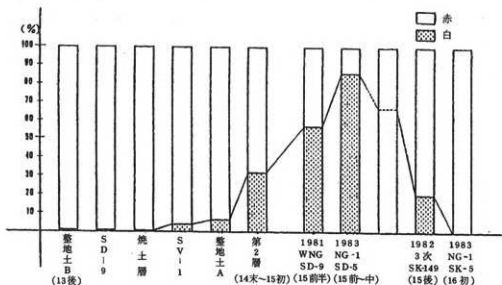
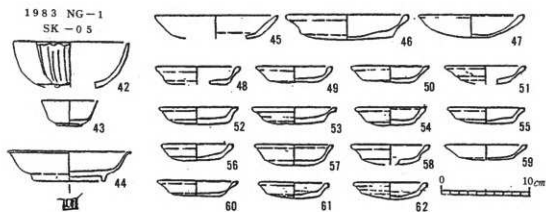
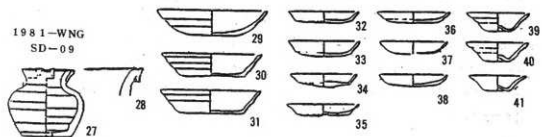
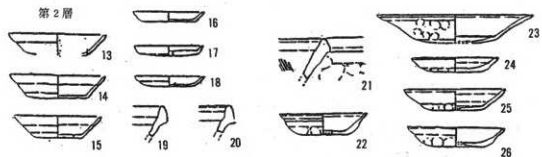
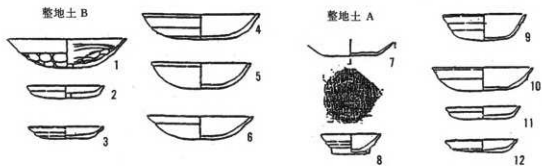


表2 土師器皿に占める白土器の比率



白土器 7. 9. 10. 13. 14. 15. 22. 26. 29~41

瓦器 1. 4. 瓦質こね鉢 21. 備前壺 27. 常滑甕 28. 青磁 42. 白磁 43. 44

瓦器焼消滅後の土師器の様相

(社)和歌山県文化財研究会技術員 佐伯和也

発掘調査の増加に伴ない和歌山県では各時代の資料が蓄積されつつある。今回は、15世紀前半代に時期を絞り、瓦器焼消滅後の土師器の様相、瓦器焼の消滅が土師器に及ぼせる影響を与えるのか、蓄積された資料を使って考えてみたい。周知のように、和歌山県における瓦器焼の消滅時期は、橋本市東家遺跡SD-01資料で判明する。SD-01には、堺市で1399年直前に位置づけられている内面に荒いハケを持った瓦器皿が出土するが、この溝には、既に瓦器焼が存在しない。少なくとも和歌山県伊都郡内では、14世紀末をもって瓦器焼、皿が消滅したものと考えられる。以下で示す紀北地方の15世紀前半代と想定される三遺跡の資料を使用し、土師器の様相を考えてみたい。

根来寺西部地区 SD106 資料 土師器皿・羽釜・鍋、瓦器羽釜、東播系すり鉢、常滑甕、など出土する。土師器皿は、口径7、9、12cmと三種類に分類できる。7cmの小皿などには、ヘソ皿などがある。良質な胎土をもつ白土器など多量に出土する。

橋本市東家遺跡 SD-09、SD-01 資料 東播系すり鉢、瓦器すり鉢、羽釜、白磁皿など出土する。土師器皿は、口径8、10cmの二種類に分類できる。

高野山新収蔵庫建設予定地内下段第7次整地層 整地層出土遺物という資料がもつ制約があるが、瓦器など含んでおらず、共存遺物などからも15世紀前半代の位置づけができる。土師器皿、羽釜、東播系すり鉢、瓦器すり鉢、備前焼すり鉢など出土する。土師器皿は、口径にばらつきがみられるが、8、12cmの口径が多い。数量であるが白色系土器が存在する。

以上、15世紀前半代と考えられる三遺跡の資料の概略をみたが、これらの共通点と相異点は以下の通りである。

<共通点>

1. 9、15cm、3寸、5寸の規格が崩壊している。5寸の皿は、消滅し、各遺跡共に存在しない。
2. 各遺跡共に、土師器皿には、底部を糸切りで処理したものが存在しない。

<相異点>

1. 根来寺資料で多量に出土する白土器が、高野山資料では微量、東家遺跡では存在しない。
2. 口径7、12cmの皿が東家遺跡で存在しないのに、他二遺跡では存在する。
3. 高野山では、口径にばらつきがみられるのに、他二遺跡は比較的まとまりをみせる。

15cmの大皿が存在しない点や糸切り土師器の消滅などの点は、各遺跡の性格の違いに拘らず共通する点である。しかし、相異点については、遺跡の性格や地域差、あるいは時期差など多分に考慮されるべきと考えられる。例えば、口径の相違点や白色系土器の問題などである。白土器は根来寺に必要な器種で、他二遺跡には必要ないものと考えられる。少なくとも三資料からは、土師器皿は、前代から比べれば縮少した点が指摘できる。瓦器焼の消滅が、土師器皿の容量を大きくするような、

「碗」の機能を土師器皿が担う様な状況はないものと考えられる。

畿内及びその周辺地域の11～14世紀にかけての主要な供膳形態は、瓦器（碗、皿）、土師器（皿）であるが、15世紀前半代においては、瓦器碗、皿や土師器大皿など主要な供膳形態を担った器種が全て消滅し、それに変わる器種が存在しない。一部大皿が存在するが、小皿と比較すれば極端に量が少なく、主要な器種でないと考えられる。この主要な供膳形態の消滅現象は、15世紀前半段階で突然生じたことではなく、13世紀以降、瓦器碗、皿、土師器皿共に、口径、器高が縮少する点、すなわち、容量が少なくなる現象の完成された姿である。供膳形態の縮少化の即時的な案として、磁器や木器があげられるが、この現象を説明するに値するものか、あるいは、食生活の変化としてとらえるべきなのか等、今後の課題として確認し、今回は15世紀前半代には主要な供膳形態は存在せず、それは13世紀以降の土器の変化の延長線上に位置する事柄である点を指摘しておきたい。

参考資料

「根来寺西部地区遺跡発掘調査概報」 和歌山県教育委員会 昭和56年度

「東家遺跡発掘調査概報」 橋本市教育委員会 昭和58年度

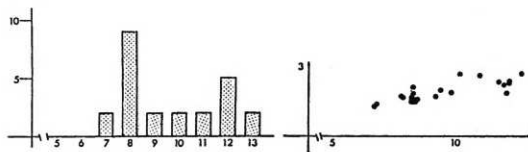


表 1. 高野山下段 第7次整地層

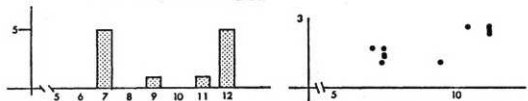


表 2. 根来寺西部地区 SD 106

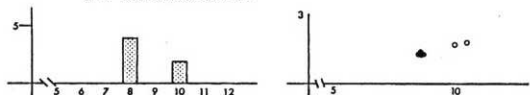


表 3. 橋本市東家遺跡 SD 01.09

〈資料紹介〉

吉礼砂羅谷古窯跡群表採遺物について

(社)和歌山県文化財研究会技術員 武内雅人

本項で紹介する資料は、紀伊風土記の丘資料館遺物収蔵庫に吉礼砂羅谷古窯跡群表採遺物として保管されていたコンテナ三箱分の資料のうち的一点である。採集された場所、日時等の詳細は不明であるが、実態のほとんど不明な和歌山県下における須恵器生産、とりわけ初期の生産を考えるうえで重要な資料と考えられる。

図-1がその資料で、復元口径 16.2cmを測る壺の口縁部と思われる。直線的に外反する口縁部の端面は大きく拡張されて凹面をなし、口縁部の中程に、器壁を内側から押し出すようにしてヒネリ出された一条の凸帯を巡らせる。外面には水平に近い傾むきの平行叩き目が微かに残る。色調は赤味を帯びた灰褐色を呈し、胎土中に結晶片岩、石英の細かい粒子をわずかに含むが非常に緻密で硬質に焼成されており、器壁の断面はチョコレート色をなす。

同じ形態上の特徴を有する遺物の出土は和歌山県にあっては音浦遺跡溝 2(2)、鳴滝遺跡(4~7)、楠見遺跡(8)の例が知られており、口縁部の拡張の度合いがやや不十分な近似した例は鳴神V遺跡SD-03(3)に認めることができる。これらはいずれも初期須恵器、韓式系土師器を伴って出土している。そして特に(1、2、4~8)については、水平方向に近い横位の平行叩き目という日本出土の初期須恵器のなかでも顕著な技法上の特色を有している。

次に県外の出土事例をみると、ほぼ同じ形態のものが岡山県押入西1号墳(11)から出土している。同資料には楠見遺跡、鳴滝遺跡、鳴滝2号墳、鳴神V遺跡、音浦遺跡など紀ノ川下流域出土の初期須恵器大形壺に例の多い肩部の小突起が付けられており、さらに鳴滝遺跡出土大形壺^{註1)}にみられる底部の「シボリ込み」技法が見られる点など注目すべき遺物である。他には近似例として高槻市岡本山A-3号墳(10)、八尾市八尾南遺跡(9)をあげることができる。県外出土事例についてもきわめて初期の須恵器あるいは陶質土器に位置づけられる遺物に類例が求められよう。また陶邑窯^{註2)}にあっても近似した器形のはTK-305号窯出土品に認めることができる。TK-305号窯出土品の場合は土師器の器形から成立した二重口縁の壺として扱われており他の出土事例との関連は明らかではないが、陶邑窯での生産を見る限り少なくともこの種の器形がⅠ型式2段階より後出するものではないことは窺えそうである。

以上のことから本項で紹介した資料が初期須恵器に位置づけうるものであることは明らかになったことと思う。ところで、吉礼砂羅谷古窯跡群は県下の須恵器生産遺跡のなかで学術的調査のメス^{註3)}が入れられた数少ない遺跡であり、1978年の調査では少なくとも五基の窯跡が確認されている。そしてその生産がⅡ型式1段階あるいはⅠ型式5段階に遡ることが明らかとなっている。本窯跡群は岩橋千塚古墳群の所在する山塊の南麓に位置し、その生産も岩橋千塚古墳群の造営と無関係ではあり得ず、生産の契機も他の大部分の地方窯と同じく群集墳の造営に伴う須恵器需要の拡大に求められよう。ところが本項で紹介した資料によればその生産はさらに遡りうることとなる。そうすれば

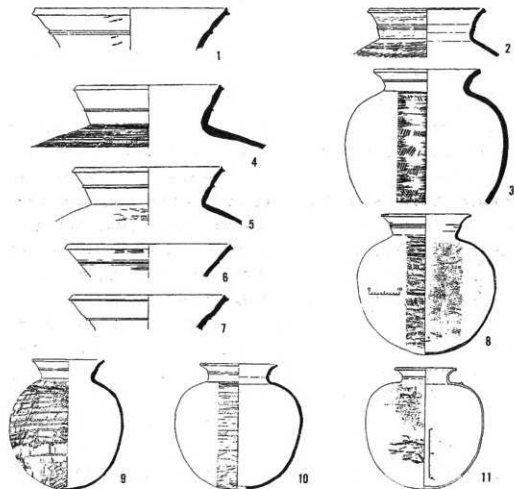
当然のごとく上述の本古窯跡群の評価も再検討をさせられることになる。

近年、各地で発見のあいだいでいる初期須恵器窯跡の操業期間がきわめて短いものであることや陶邑古窯跡群Ⅰ型式3段階以降、各窯で定形化した須恵器を生産し始めるといった須恵器生産の社会的背景からみて、本項で紹介したわずか一片の表採資料の示唆するところは少ないものではないといえる。近い将来の本格的な学術調査を熱望するものである。

註1) 「鳴滝遺跡発掘調査報告書」 和歌山県教育委員会 1984年

註2) 「陶邑Ⅲ」 大阪府文化財センター 1978年

註3) 「砂羅谷古窯跡群発掘調査概要報告書」 大谷女子大学資料館 1979年



1. 吉礼砂羅谷古窯跡群 表採遺物 約 1/3
2. 音浦遺跡溝 2 出土遺物 約 1/6
3. 鳴神V遺跡 SD-03 出土遺物 約 1/6
4. 鳴滝遺跡出土遺物 約 1/4.5
4. 鳴滝遺跡出土遺物 約 1/4.5
5. 鳴滝遺跡出土遺物 約 1/4.5
6. 鳴滝遺跡出土遺物 約 1/4.5
7. 鳴滝遺跡出土遺物 約 1/4.5
8. 楠見遺跡出土遺物 約 1/12 (和歌山市にある古墳文化 1972 和歌山市教育委員会)
9. 八尾市遺跡出土遺物 約 1/8.5 (八尾市遺跡出土遺物 日本陶磁の源流 柏書房 1984)
10. 高槻市岡本山A3号構出土遺物 約 1/8.5 (同上)
11. 岡山県押入西1号墳出土遺物 約 1/15 (同上)

〈遺跡紹介〉

昭和57～59年に和歌山市が実施した主な埋蔵文化財発掘調査の概要

和歌山市教育委員会社会教育課 大野左千夫

1 和歌山城西の丸跡発掘調査（昭和57年1月～3月）

西の丸の整備工事に伴って、遺構の残存状況を確認するためにおこなった。上下2層の遺構面が確認され、廃城時のものである上層の遺構面について調査をおこなった後、砂で被覆し埋め戻した。

上層の遺構としては、建物礎石・建物延べ基礎と考えられる破石列と雨落溝・青石を用いた方形の石囲い・青石積みの溝・ごみ穴と考えられる各種の土坑、などが検出された。遺物としては、瓦類（巴文軒丸瓦・唐草文軒平瓦・鳳羽文軒平瓦・丸瓦・平瓦・棧瓦など）、陶磁器（染付・瀬戸・備前・瑞芝焼・西の丸焼・土師質土器類）、鉄釘・銅線・寛永通宝、軽石製品、自然遺物（シジミ・ハマグリ・サルボウ・アワビ・サザエ・ウミガノ・タイ・ツル・ネズミ・ネコ）などがある。なお、和歌山城に関わる発掘調査は、一ノ橋門跡（昭和56年10月～11月）・一ノ橋橋脚確認調査（昭和57年11月）・追廻門（昭和59年3月）を実施している。

2 園部円山古墳緊急発掘調査（昭和58年2月～4月）

園部円山古墳は昭和57年12月に土木工事中確認された古墳で、墳丘測量と横穴式石室羨道部の発掘調査をおこなった。墳丘測量およびトレンチの観察からみて、直径25mの円墳と考えられる。石室は両袖式の横穴式石室で、大型の砂岩を用いている。全長955・支室長430・支室奥壁幅190・中央幅270・羨道幅150～180（cm）あり、南47度西方向へ開口している。支室内には土砂は流入しておらず、拳大の礎石が観察された。羨道部は土砂で埋っていたが、土砂を取り除くと閉塞石が遺存しており、7段分（約1m）が残存していた。閉塞石から内側の羨道床面には青石割り石が敷設されており、この石敷の中に左側壁に接して櫓が埋め込まれていた。この敷石を除去した下から須恵器台付壺を破砕した破片がばらまいたような状態で検出された。

円山古墳は紀の川北岸の鳴滝川東岸丘陵突端にあり、大谷古墳周辺から鳴滝古墳群にいたる古墳群のなかにおいて、奥出古墳とともに単独墳であること、砂岸大石を用いており、紀の川下流域でも有数の大きさの石室をもつことが注目される。なお、和歌山市指定文化財（史跡）として指定、保存する方向で作業を進めている。

3 大谷古墳保存整備事業に伴う墳丘確認調査（昭和58年8月～9月）

墳丘規模および盛土の状況を確認するため、16個所にトレンチを設定した。墳丘裾部の確認により、全長67m・後円部直径30m・前方部幅48mあることが判明した。ただし、敢円部は正円ではなく、やや主軸方向に長い。前方部前面裾部はやや中央（主軸上）で張り出した、いわゆる剣先状を若干早している。墳丘盛土は確認されず、大部分が岩盤の整形によっていると思われる。後円部には中段を意識した個所がめぐっており、とくに東端部ではテラス状をなしている。南側くびれ部のテラス状地も墳丘に付属して形成されたもので、埴輪列などは検出されなかったが、造り出し状の部分と考えられる。主体部（石棺埋納）の周辺で岩盤の落ち込みが検出され、主体部に関係したも

のとすれば、基壇がこの部分では2段に掘られており、その上段の掘屑と考えられる。埴輪は後円部裾部の埴輪列から離れたトレンチでもかなり出土し、部分的に（南側くびれ部など）埴輪列がつけられていた可能性もある。

4 その他の調査

山口小学校グラウンド用地試掘調査（昭和57年4月）

山口小学校新校舎建設に伴う発掘調査（昭和57年7月～10月）

太田黒田遺跡（第一生命社屋用地）発掘調査（昭和58年12月～昭和59年1月）

四ヶ郷一里塚整備工事に伴う発掘調査（昭和59年3月）

山口幼稚園々舎建設に伴う発掘調査（昭和59年4月～7月）

市道山口西脇線用地内（木本小学校Ⅱ遺跡）試掘調査（昭和59年10月）

有田郡吉備町土生池遺跡の第二次発掘調査

（社）和歌山県文化財研究会技術員 武内雅人

調査期間 1984年7月15日～11月10日

調査対象 旧石器時代の遺物包蔵地

調査のあらましは以下である。

土生池遺跡は有田川左岸の洪積台地上に北西方向に開く小規模な開折谷にあり、通称土生山の西南部に広がる標高約30～40mの緩斜面上に立地する。この緩斜面は四カ所の舌状の台地で構成されているが、町道新設に伴う今次の発掘調査はそのうち三カ所の台地の先端近くを幅約14m、長さ約160mにわたり南北に横断するように実施された。

その結果、発掘区域のほぼ全域で旧石器時代の遺物包含層の遺存を確認、当該時期の遺物としてはナイフ形石器45点、スクレイパー8点、台石1点、石核10点、剥片535点を検出した。これらの検出遺物を石材別にみると、サヌカイト523点、頁岩系66点、チャート10点、砂岩系9点、花崗岩1点となる。一言で概括するならばサヌカイト製の小型ナイフ形石器が主体の遺跡といえるが、ナイフ形石器には、国府型ナイフに近い形態のもの、その基部側を整形加工したもの、および両縁を調整したものや、横長剥片あるいは縦長剥片を利用したもの等があり実に多様である。

また当該時期の遺構としてはピット状遺構が4、落ち込み状遺構が4、溝状の遺構が2検出されている。この他にも遺物の出土状況からブロックとして把えることのできる遺物群が六カ所で検出されており、接合資料も得られている。

なお、現在始良火山灰層の検出、C14年代測定、サヌカイトの産地同定等もおこないつつありその結果は出土遺物の整理とともに期待されるところである。

橋本市内の埋蔵文化財について

橋本市教育委員会社会教育課 大岡康之

橋本市は和歌山県の北東部に位置する人口4万余りの都市である。市域の北部・南部はそれぞれ和泉山脈・紀伊山地の山々によって占められ、中央部を紀の川が東から西へ貫流している。紀の川周辺にはわずかながらの平野を形成していて、現在橋本市に所在する54か所の埋蔵文化財包蔵地の大部分はこの地域に集中している。

血縄遺跡は過去に紀の川用水工事やグリッドによる遺跡範囲確認調査がおこなわれ、多数の遺物が出土した。これにより弥生時代後期に当地に集落が形成されていたことはほぼ間違いないものと思われる。

市脇遺跡はこれまでに4次にわたる調査が実施されてきた。縄文時代では後期・晩期の土器をはじめ多量の石製品が出土し、炉状遺構、集石遺構、土坑等の遺構が発見されている。また竪穴住居跡が弥生時代中期から古墳時代前期にかけて7棟確認されている。

陵山古墳は緑泥片岩による横穴式石室をもつ直径45mの円墳である。周囲は県内唯一といわれる水濠がめぐっている。近年羨道部の崩壊がすすんできており、今後の保存整備が重要な問題となっている。

神野々庵寺は過去3次にわたる発掘調査を実施したが、塔以外の伽藍については未だ確認されていない。しかし、瓦溜りが数か所で検出されており、他の伽藍が存在していた可能性も残されている。

東家遺跡は古墳時代中期・後期を中心とする遺跡で、18棟にも及ぶ竪穴住居跡が発見されている。特に須恵器は器台や列点文を有する杯などの初期須恵器をはじめ多くの貴重な資料が出土している。また中世の遺構遺物も発見されており、中でも東西にのびる幅5mをはかる大溝は予想外の貴重な発見となった。

ここでは過去の調査等で遺構遺物の確認されたいくつかの遺跡を紹介したが、開発が進みつつある当市においては今後文化財の重要性を一層強く訴えてゆかなければならない。

1984年度和歌山県埋蔵文化財発掘状況

和歌山県文化財研究会技術員 井石好裕

本年度も県下では、埋蔵文化財の発掘調査が各地で実施されている。以下、その概略を各遺跡別に紹介する。

〈紀北地域〉 高野山(1) 高野山においては1981年度の大門修復に伴う発掘調査をはじめ幾度か調査がおこなわれてきた。本年度は高野山大学内を発掘中で、12世紀代から15・6世紀にかけての遺物が出土している。遺構は現在のところ明治時代のもを検出中である。佐野遺跡(2) 1975年より断続的に調査されている弥生時代末～古墳時代の集落跡である。今年度は、現在、中世の

遺構・遺物が出土している。根来寺坊院跡（3）1980年より始まった10ヶ年計画の5年目にあたる本年は山内で2ヶ所、山外で1ヶ所調査がおこなわれ、近世の塔頭跡を中心に多数の遺構を検出すると共に、国産・輸入陶磁器を多量に出土している。田屋遺跡（4）紀の川北岸に位置する弥生時代～古墳時代の集落跡である。国道24号線バイパス工事に先立つ事前調査であり、1981年度より継続して調査がおこなわれている。4年目にあたる本年は、古墳時代の方形堅穴住居址2基、弥生～古墳時代のもと考えられる自然流跡等の遺構を検出した。住居址の内1基は南東隅に造り付けカマドを有する長方形のもので、小形丸底壺と陶質土器が共伴して出土する。5世紀中葉前後と想定される。西田井遺跡（5）田屋遺跡の東方に隣接し、北田井遺跡の南方に位置する。現在、調査が開始されて間もない段階であるが、弥生時代から中世にかけての遺物が出土し、弥生時代の溝、中世の堀立柱等の遺構が検出されている。亀川遺跡（6）縄文時代から中世にかけての集落跡であるが、本年度は弥生時代の住居址等の遺構、縄文～弥生時代にかけての遺物が多く出土している。



<紀南地域> 大引遺跡（7）由良町大引海岸に位置し製塩遺跡とされている。本年度の調査では、遺構は存在しないものの、残存状態の良い遺物を多量に出土した。6～9世紀の須恵器、奈良～平安時代の土師器・製塩土器、平安時代の黒色土器、中世の瓦器等である。立戸岩陰遺跡（8）岩陰を利用した製塩遺跡・岩陰墓遺跡等が数多く存在する田辺市にあり、本年度帝塚山大学により発掘調査がおこなわれた。製塩炉2ヶ所、埋葬人骨10体が出土している。

あとがき

埋蔵文化財情報17号をおとどけます。県下では、各地で各時代にわたって埋蔵文化財の発掘調査が実施されています。また発掘調査によってえられた遺構・遺物に関する資料の整理作業もおこなわれています。我が郷土の先達が残した、数多くの埋蔵文化財を、発掘調査によって一つ一つ解明し、紀伊の重層した歴史を今の私達の眼前に提示する作業は、無名の数多くの人々の力によって確実に蓄積されています。私達の子供達へとこの蓄積は継承されていかねばなりません。その意味で、埋蔵文化財担当者にかせられた責務は大きいと考えられます。

今回は、紀伊において遅滞している各時代の編年案（弥生・中期、11～14世紀の中世土器、14～16世紀陶磁器類）を中心に、特定器種の消長や様相の諸問題——研究ノート——、或いは、紀伊国須恵器生産の初現にかかわる資料の紹介、また県下の埋蔵文化財の情報と基本的に三本立てです。

渋谷

1985. 3

埋藏文化財情報 17

編集 社団法人
発行 和歌山県文化財研究会

印刷 邦上印刷